学び続ける学校

別海町立別海中央中学校　校長室便り
発行　校長　青坂信司
第１３号平成２７年１２月２２日（火）

※二学期、生徒たちも職員も大変よく頑張ってくれました。

「現場から学ぶこと」が教師としての学びの基本

◆私の教師としての考え方は、人と会ったり、人の話を聞いたり、勉強会を開催したり、セミナーや講演会に参加したり、読書することで形成されてきた。しかし、それ以上に自分の学校の先生方や子供たちに影響されて形作られてきたと思っている。とりわけ、先生方の実践を見たり、知ることが一番大きなものとなった。「現場から学ぶこと」それが一番大切なのだと思う。

◆校長となって、一日に最低三回は、授業時間、校内を回って歩く。授業の様子を観察したり、教室の中の雰囲気を感じたりするためである。先日、教室の廊下の窓から、たまたま見えた授業の様子。黒板に外国の本物の紙幣を貼って授業している。子供たちは、目を輝かせるようにその紙幣を見ている。その授業の様子を見たのは、わずかな時間なのだが、私には興味深く感じ、頭の中であれやこれやを考えることになる。本物の紙幣を子供たちに見せるというのは、興味関心をひくだけでなく、実感を伴った理解へといざなうものだ。

◆それは、私が授業者であった時、学んだことの一つだ。「本物」「具体物」の力というのは、予想以上に大きいものがある。ある先達の優れた教師は、「授業の準備はモノを用意することから始まる」と言った。それほどモノの威力というのは凄いものである。まさしく今教室で実践されている教師の実践が、そうしたことを思い出させてくれる。そして、教師の提示したモノによって、本校の中学生も他の子供たちと同じように興味関心が高まる。その昔学んだことを私は、その教師の実践を通して再確認することになる。「モノの威力は今の中学生、本校の中学生にも通用するのだ」と。

◆全国中学校長会の機関誌『中学校』の１２月号に早稲田大学教授の田中博之氏が次のように書いている。

> 生徒が「本当にそうだ」といった納得感や、「難しかったけれど解決できた」といったやり遂げ感を味わえる学習には、できることや分かることの実感を得させる工夫が必要である。

◆田中博之氏は、実感を伴った理解の大切さを述べている。「モノ」を教室に持ち込むということは、まさしく実感を伴うことになる。これは、教師からの一方的な講義だけでなく、写真や動画等を持ち込むことでも可能となる。当然、授業の組み立て方や授業の展開に応じて、どのようにモノ・写真・動画等を提示するのかという課題はあるものの、教師の言葉だけに頼った授業より、生徒たちの理解は進むものである。

◆他の教科でも、写真や動画等をテレビ画面に映し出して毎時間のように生徒たちに見せている教師がいる。生徒たちは興味深くテレビ画面を見つめている。もちろん、教科の特質によって、モノ・写真・画像等を取り入れやすい授業もあれば、取り入れづらい授業もある。そうだとしても、大切なことは「実感を伴った理解」を、どのような方法で達成できるのかを教師が考え抜くことである。教師が、今、目の前にいる生徒のために考え抜くことが、必ず生徒の事実・教育の成果となって現れてくる。基本的に、授業とは、教師と生徒の相互作用の結果として成立するものだからである。